終末狂想曲

すごいブラジル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永久凍土で見つかったクマの死骸から未知の感染症が流れ出た。

その感染症は接触感染によって拡大し、感染した人間から知性を奪い去る危険な代物だった！

やがて感染症は人間の生活圏にも入り込み、感染者は増えてゆき…

目次

プロローグ　7月2日・午前 ―― 1
7月2日・午後1 ―― 4
7月2日・午後2 ―― 11
7月2日・午後3 ―― 16

プロローグ　7月2日・午前

２０２３年６月１５日、ノルウェーから世界へとあるニュースが届いた

「永久凍土からほぼ完璧な保存状態のホラアナグマ発見！」

温暖化の影響かなんかで永久凍土が溶け出し、数万年前にいたデカいクマの死骸が見つかったのだとか。

これだけならよく見つかる話らしいがより重要なのはその保存状態だった。

体のあちこちは腐ったり壊死して外から見ると死んでるようにしか見えないがなんと脳がまだ活動していたのだ。

このホラアナグマを蘇生させられれば２１世紀最大の科学の進歩になるだろうと研究者たちは報じており、世界中の人々がそれを心待ちにしていた。

しかし、そのうち民衆は東ヨーロッパでの戦争や不景気に気を取られ、忘れ去っていった。

プロローグ

２０２３年７月２日

スマホの目覚ましに起こされハルペリンは目を覚ました。

いつものように洗面所に向かい、顔と歯を磨く。
今日が休日だということを除けば全くもっていつもと変わらない日だ。
これといった予定がないため、別に8時過ぎまで寝ても構わないのだが生活リズムを崩すことは好きではなかった。
「そういえば今日はバーバラに新しい靴買ってやるんだったな…」
そうボソッと呟くと俺はリビングまで移動してなんとなくテレビをつけた。ニュースがやってる。
「昨夜、ニールバーグの市民公園で４０代の男性が周囲にいた人物４名に暴行を加える事件が発生しました。通報を受け駆けつけた警察官2名にも腕に噛み付くなどの暴行を加え、男性は暴行と公務執行妨害で現行犯逮捕されました。」
この不景気ともなると他人に当たりたくなる奴も出てくるんだな。
そう思いながらしばらくニュースを見たあと、朝食作りに取り掛かり始めた。
妻のセリーナは仕事の都合で日本に出張しているのでここ数日の家事は自分で全て行ってる。
しばらく目玉焼きやトーストを焼いていると娘のバーバラが起きてリビングに来た。
「パパおはよう…」
「うん、おはよう！」

朝起きる時はしっかりと挨拶しようと心がけている。（これといって意味はないが）
「もうすぐ食事の支度できるから顔洗ったらしろよ」
「うん…」
何とも眠たげな返しをして、娘は洗面所に行った。
今日は午前中はあいつに勉強させて11ごろからショッピングマートに行くか。
そんなことを考えているうちに料理は完成した。
こうして2人で食事を食べたあと、娘に社会の勉強をさせ、11時過ぎごろに一緒に車に乗って街の中心の方まで向かっていった。この日は本当に何気ない平和な1日だと思ってた。
空には3機の軍用ヘリが飛んでいた。

7月2日・午後1

自分たちが住んでる住宅街からショッピングモール等が並ぶ大通りに向かうため、ハルペリンは人通りの少ない商店街へ車を向かわせた。

２０年前はかなり賑やかだったのだが時代と共に徐々に寂れてゆき、今はマニアックな骨董品店やコーヒーショップなどしか残っていない。

車を走らせるうちに彼はひとつ違和感を感じた。

店と店の間の路地に３人の警官が立っていた。

これだけならただのパトロールにしか聞こえないが、彼らはやけにしっかりした装備をしていた。

大して治安の悪い地域でもないのに何故か防弾チョッキを身に纏い、ショットガンも手にしていた。

（このご時世だから強盗でもしようとするやつでも出てるのだろうか…）とでもボーッと考えていると、後ろの席でＹｏｕＴｕｂｅを見ていたバーバラが「パパ、どうかしたの？」と、ちょとんとした顔で聞いてきた。

「いや、なんでもない」と適当にはぐらかした返事をした直後、車のボンネットに突然大

きな衝撃が来た！
「キャッ！」
バーバラは悲鳴を上げ、「大丈夫か！怪我はないか！」とハルペリンは娘の身の安全を確認した。
幸いシートベルトをしてたから彼女は無事だった。
娘の身の安全を確認した彼は今度は急いで車の外を出た。
衝撃からしておそらく生き物がぶつかったように思えたからだ。
ボンネットの方に回るとそこには赤い服を着た2人の男女が倒れていた。
しかし、よく見るとそれは赤い服を着ていたのではなかった。
真っ赤な血飛沫を浴びたことでその服は赤くなっていたのだ。
男はもう片方の女から逃げていたのか「助けてくれ」と必死にうめいている。
ハルペリンは一瞬混乱したが、すぐさま救急車を呼んだ。
スマホで1・1・1の緊急番号に電話をした。
しかし何故か電話は異様に繋がらない。
（日曜日といえどこんなに大勢の人間が一気に電話するなんてことあるのか!?）
焦りながら彼は必死に電話をかけるがやはり繋がらない。
「おい、そこの男、何があった！」

突然背後から声がしたので振り返るとそこにはさっきの警官たちがいた。
「すみません！私が車で人を轢いてしまいました！救急車を呼びたいんですけどなかなか繋がらないんです！」
ハルペリンが大声で返事すると、警官は一瞬立ち止まった。
「人を轢いた!?おいお前、一旦車に戻れ！」
（あれ、普通こういう場合って逃げられることを防ぐため車から離すんじゃ…）
違和感を感じつつも彼は車に戻った。
後ろの席ではバーバラが小さく震えていた。
「パパ、大丈夫なの？」と不安げに質問してくる。
それに対してハルペリンは優しくなだめる。
「大丈夫だからな、安心してね。」
そう言葉をかけたあと改めてボンネットの方に目を向けた。
警官は轢かれた2人の身体を確認しているようだ。
（2人とも無事だといいんだが…）
ジロジロと身体を見ていた警官は何かに気づいたようにじっと見つめた。
そうすると胸についた無線機に何かを語りかけた。
（救急車を呼んでいるのか？）

そう思った瞬間、警官は手にしていた拳銃で２人に向けて二発銃弾を撃ち込んだ！

思わずハルペリンは目を見開き、思い切りドアを開けて警察に怒鳴った。

「なんてことしてるんです！轢いてしまった私はともかく、何故この２人を撃ったんですか!?」

「これには少々事情がありまして…」

「事情とかそういう問題でｈ」

突然背後から金属音が聞こえた。

目を逸らして後ろを見ると警官は睨みつけるような形相でショットガンを自分の頭に突きつけている。

「関係者以外への口外は今のところＮＧなのですが感染者の捕獲に貢献した人物として特別にお話しします。実は現在国内で新型感染症が確認されてまして」

先程２人を撃った警官は淡々と話し続けている。

「この感染症がインフルエンザとは毛色が違う少々厄介なものでして、まぁとにかくこの感染症に感染した者への事故は不起訴処分されます。なのであなたは今回の事故で罪に問われることはありません。ですが、今回の事故はくれぐれも口外しないようお願いします。」

ハルペリンは困惑していた。

感染症に関する事故は不起訴？罪に問われない？明らかに平常じゃないことが起こっている。
しかし、なにか異議を唱えれば今ショットガンで頭を吹き飛ばされるかも知れない。
ハルペリンはどうすることもできず、ただ頷いた。
そのあと、一応確認したいと言って身分証を見せるよう言ってきたが免許証を見せるとそのまま行きたいところに行ってくれと言われたが、このまま靴を買いに行けるわけもなく彼は家に車を戻した。

「よし、じゃあこいつらの死体を袋に詰めて署に持っていくぞ。」
ハルペリンの車を見送った警官は仲間にそう言った。
1人がリュックに入っていた袋を広げて残りの2人で黒い遺体袋に入れた。
男の遺体を袋に入れて、停めてあったバンに詰め込み、女の方も袋に入れようとした。
その時、女の遺体が目を見開き警官に思い切り噛み付いてきた！
「うわぁっ！なんでこいつ生きてるんだ！」
「ちゃんと脳か心臓撃ったんだろうなぁ！」
「まずい掠ってたのかもしれん！うわぁ」
女は警官の発砲を軽々と避け次々に首筋に噛み付いていく。

「早く撃てっ！くそっ！本部！応答せよ！応答せよ！」
警官の悲鳴も虚しく、ただ寂れた道に響いていった。

一体あの轢いてしまった人間はなんだったんだろう
帰宅したハルペリンはリビングでＴｗｉｔｔｅｒを開き、他人が似たようなことを体験してないか情報を探そうとした。
バーバラは二階の子供部屋でＹｏｕＴｕｂｅを見せて一旦落ち着かせてる。
どうやら人が人を獣のように襲うという事件はこの国だけではなく世界中で起きているようだ。
「変な人に噛まれた彼氏が次の日から言動がおかしい」だの「両足がない人間に夜中公園で襲われた」だのフェイクかもよく分からない話も出ている。
本当にこの世界は大丈夫なのだろうか。
どんどん胸から立ち上る不安を募らせながら庭に目を向ける。
空はすっかり夕空で綺麗なオレンジ色だ。
空をボーッと見ていると突然テレビがニュース速報を伝え出した。
「速報です。ただいまより、デスモンド総務大臣より国民に向けた緊急の記者会見を始めるとのことです。」

ハルペリンはソファに腰掛け、テレビをじっと見る。

5分ほどの時間ののち、記者が集まる会見場に総務大臣のデズモンドが現れた。

「国民の皆様、総務大臣のデミトリアス・デズモンドです。これから我が国、そして世界中で発生しているとあり事実についてお話しします。」

7月2日・午後2

大臣は重々しくその口を開いた。

「現在我が国を含むヨーロッパの10カ国で新型の感染症が確認されています。この感染症の種別はEMA（欧州医薬品庁）が設立した疾病症対策チームの報告書によると現在確認されてるどの感染症とも当てはまらないとのことです。感染者の症例からこの感染症はいわゆる冬虫夏草の一種とされていますが、感染の拡大が菌類のそれとは一致しないなど不確かな点が多いのが現状です。」

大臣が話していると、秘書らしき男がスクリーンを運んできた。

「そして、現在分かっている感染の経緯は以下の通りです。」

大臣はをスクリーンを指差す。

1、感染症は血や唾液などの体液から感染する

2、感染者は最初の3時間は無症状でいる

3、無症状の後、感染者は突然高熱と吐き気を催し、昏睡状態になる

4、昏睡状態になってから2時間経過すると感染者は脳死に近い症状を見せる

5、それから20分後、感染者は知的能力を失った様子を見せ、非感染者に攻撃的に

なる

「感染者は知的能力や社会性を失い他者への攻撃性を増大化させます。また、感染者は生命力を非常に高め脳や肺、心臓などの重要な器官を損傷しない限り不死身に近い振る舞いをとることが確認されています。」

２時ごろに自分が轢いてしまった２人、銃で武装した警官…ハルペリンは段々嫌な予感がしてきた。

大臣が話す中、１人の女性記者が手を上げた。

「すみませんデズモンド大臣、現在この感染症の治療方法等は判明していますか？」

秘書が質問を止めようとしてきたが、大臣は壇上からそれを止めるよう顎で指示した。

「ええ、今彼女が問いかけて来た質問に対するアンサーですが現在この感染症を治す手段は判明しておりません。」

記者たちはざわつき始める。その中大臣は少し大きな声で宣言した。

「現在ＥＵと我が国は官民一体となり感染症の研究、封じ込めに尽力しております。そして、我が国はこれらの地域でロックダウンを行います。」

スクリーンに映っていた画像が地図に変化した。

「この地図で赤く塗られている地域は軍と警察によって感染者が発見され、今現在も封

じ込めが行われている地域です。これらの地域では本日２０時より軍による一週間の都市封鎖が行われます。」

記者たちはカメラのシャッターを切る。

ハルペリンは地図をよく見てみる。ミュング地方一帯にマンハウム、国の２０％近くの地域が赤くなっているようだ。

自分たちの住んでいるレムシャブルグ東部は…赤だ。真っ赤に塗られている。

ハルペリンの予感は的中したように感じた。

やはりあの２人は感染者だったのだろう。

そう考えればパニックを抑えるために警察は隠蔽しようとしてたなど辻褄が合う。

「これからの一週間、国民の皆様には不便がかかると思われますが何卒ご協力していただくようお願いいたします。」

大臣は一礼するとそのまま会見場の裏へと行ってしまった。

記者からはさまざまな声をかけられている。

「大臣！感染症の発生源は特定されていますか！」

「封鎖地域の住民への補償はどうなっているんですか！」

「この度の感染症はゾンビに非常に似ているといった声がネット上で上がっておりますが、それについてどう思われますか？」

テレビから様々な声が届いてくるなか、家の外から車のエンジン音が聞こえてきた。
窓から様子を見てみると隣の家の前に軍用車のハンヴィーが停まっていた。
ハンヴィーから2人兵士が降りてくるとその家のチャイムを鳴らした。
「失礼する、陸軍の者だ。ロバートエイドリアンはここにいるか。」
玄関から不安げな顔をした老夫婦が現れた。
「なんだいあんたら、こっちだって暇じゃあないんだよ。」
夫が不満げな声を漏らす。
「エイドリアンだね、あなたには本日15時42分に新型感染症感染者が経営するカフェに来店した証拠がある。その時感染している可能性があるので至急隔離施設のあるアラウン陸軍基地までご同行願いたい。」
片方の兵士はなにやら書類を見せている。
「なんだって?·会見でもあの大臣、唾液やら血やら飲まなきゃ問題ないって言ってるじゃねぇか。俺はあそこで飲み物は飲んでねぇし、なんで基地まで行かなくちゃならねぇんだよ。」
夫はほくそ笑んで言った。
「ご同行を、お願いします。」
兵士はゆっくりした口調で話した。

「あんたらもしつこいな、さっきも言ったが俺は…」
夫がまた話そうとした時、突如兵士がホルダーから拳銃を引き抜き夫の眉間を撃ち抜いた。
「な、な、なんて事するんですか!?」
妻が悲鳴をあげそうになった瞬間、兵士は妻にも銃声を響かせた。
兵士はホルダーに拳銃を戻し一言溜息をついた後胸の無線機に話しかけた。
「こちらシュナイダー、住民二名が同行を拒否したため処分を行いました。どうぞ。」
「了解。次は隣のフォード家のところに向かえ。その家の住民は数時間前車で感染者を轢いている。感染している可能性は高い。必ず同行させるか処分しろ。健闘を祈る。」
兵士は無線を切ると、この家の方へと顔を向けた。
まずい!このままでは!

7月2日・午後3

兵士は庭を伝ってそのまま家の敷地に入ってきた。
老夫婦への発砲、そして大臣の会見内容…
この非常時からしておそらく彼らはさっきと同様連行するか射殺するかのどちらかしかしないはずだ。
しかし、感染者はゾンビとしか言いようのない怪物になるらしい。
ならば感染の疑いがあるだけでも相当厳しい環境へ連れていかれるだろう。
こうなったからには一つ、
ここから逃げ出すしかない！
幸い弟の家は確かまだ感染者が見つかっていない沿岸地域にある。
そこに匿ってもらえればなんとかなるだろう。
ハルペリンは急いでカバンの中に必要そうなものを詰め込んだ。
水、懐中電灯、スマホの充電器、日持ちしそうな食料品、着替え。
そして悩んだ末に十得ナイフも放り込んだ。
カバンを用意した彼は二階のバーバラの部屋に向かう。

外からチャイム音がする。居留守がバレないといいが…

「どうしたのパパ？そんなに焦って？」

バーバラは疑問げに聞いてきた。

「今から叔父さんの家に行くぞ！」

「え!?そんなに急に？」

「叔父さん、新しいゲーム買ってくれたらしいぞ。遊びたくないか？」

「遊びたい！」

バーバラを半ばごまかす形でなんとか最低限の荷物だけまとめさせた。

ドアの向こうからはくぐもった声で話し声が聞こえる。

「いないみたいだな。どうする？」

「そんなわけねぇだろ。さっき二階のカーテンが揺れるの見えたぞ。」

「居留守か…扉こじ開けてでも連れて行くか処分せんと上に文句言われるぞ」

「バール取ってくるからちょっと待ってろ」

くそっ、バレたか！

慎重に2人は階段と降りるとそのまま勝手口から外に出た。

家の裏はちょうど小さい林になってる。

そこから進めば封鎖地区からは出れるだろう。

そう思って林に入ろうとした時、
「止まれ！そこを動くな！」
先ほどの兵士がこちらに短機関銃を構えていた。
「そんな簡単に逃げ出せるほどこちとら軍隊も甘かねぇよ！基地までご同行願おうか。」
手を上げながらとなりのバーバラを見る。体を小刻みに振るわせ見るからに怖がっている。
「分かった！着いていくよ！だから頼む。その銃を下ろしてくれ。娘が怖がってる。」
兵士は数秒睨みつけそのあとため息をついて銃を下ろした。
その瞬間。兵士の上に黒いものが飛び掛かってきた！
オオカミ!?こんな市街地に出るものか？
そう思いながらよく見るとそれは鬼のような形相をした肥満な男だった。
男は兵士の腹に食らいつき、必死に攻撃している。
「うわぁ！やめろ！よせ！」
兵士は銃を乱射している。
しかし腕に何発も当たっているにもかかわらず男は尚も喰らい続けている。
ハルペリンとバーバラは必死に家の裏の林へ回った。
何度も転びそうになりながらなんとか丘のある草原まで逃げ延びた。

２人とも息絶え絶えといった様子だが、バーバラに水を飲ませ一旦落ち着いた。
冷静になったハルペリンは丘から周りを伺おうと登った。
しかしそこに広がっていたのはまさに地獄絵図だった。
燃え盛る住宅街。暴動とも略奪とも言い難い商店街の混乱。そして、高速道路を通って次々と入ってくる装甲車の列。
「ここからどうすればいいんだ…？」
冷静を装いながらも彼は動揺していた。
まず重要なのはこの街から出ることだ。
遅かれ早かれここは人が住めるような場所ではなくなるだろう。
沿岸へ行ける高速道路も軍がバリケードを築いている。
しかし、この林の中にある古道を使えばなんとか隣の州には行けるだろう。
だが隣の州までは２０ｋｍ近くある。徒歩では無理だろう。
そのために車が必要だが家に停めてある車の周りはあのゾンビか兵士のどちらかがいて、安全に乗れるとも思わない。
「さっきの太った男は誰なんだ」
ハルペリンは地域の交流会やパーティにもよく参加するので人一倍は街の住民の顔などは覚えている自信があった。

だがあの男は見たことはない。
そしてあの服装はキャンプなどのためのもの…
ピンときた彼はバーバラと共に草原の周りを散策した。
やはりだ。
そこには荒らされた形跡のあるキャンプセットとワゴン車があった。
おそらくあの男はキャンプしていたところでゾンビに襲われ、そのまま住宅地に向かったのだろう。
車に向かってみると鍵はついており、しっかりエンジンも入る。
これさえあれば！
「バーバラ、今からこれで叔父さんちまで行くよ」
「分かった！」
一応彼は電話番号を書いた置き手紙を置いて、そのまま古道へと車を走らせた。